

道頓堀川・東横堀川 浄化への道

名古屋の都心を流れる「堀川」に関心があった。名古屋城を築城するにあたり、資材を運ぶために造られた運河だ。大学の講義「現代都市問題」でも、何回か取りあげた。講義では、大阪の道頓堀川の浄化、「とんぼりリバーウォーク」のことも話題にした。そんなこともあり、日経新聞 22 日夕刊の表題記事に注目した。抜粋して紹介したい。

16 世紀、豊臣大坂城の外堀として最初に開削された堀川が東横堀川だ。北から南へ流れ、西に曲がると道頓堀川と名を変える。道頓堀川は 17 世紀、大坂夏の陣の後に完成した。合わせて長さ約 5 ㎞に及ぶ。

現在は阪神高速道路が頭上を走る東横堀川の北端近くに東横堀川水門がある。船が通る際に水位を調節する閘門で、ブルドーザーの排土板を思わせる水門と観音開きの水門の二重構造。往来する船は 2020 年度こそコロナ禍で激減したが「19 年度は年間約 7300 隻に上った」（大阪市建設局）という。道頓堀川の河口にも同様の道頓堀川水門がある。どちらも船の通過時だけでなく、潮の干満に合わせて開閉して川を浄化する大事な役割を担う。

大阪の堀川は河床の勾配が小さく、流速や水位が潮の干満に影響されて河川の水が海へ排出されにくい。浄化のため戦前、可動堰が市内に 6 カ所に設けられた。川をせき止めて水をため、どっと押し流す仕組みだった。戦後、堀川が埋め立てられて順次務めを終えた。堂島川の水晶橋や土佐堀川の錦橋はその名残だ。

人口や事業所の急増で道頓堀川と東横堀川で汚染が深刻化したのは 1950～60 年代。78 年に設けたのが東横堀川水門だった。「満潮時に開門して大川の比較的きれいな水を導入。干潮時に締めて寝屋川からあまりきれいではない水の流入を止め、川下の道頓堀川水門を開けて水を排出する」（同）。現在の水門は 2000 年築造の 2 代目だ。

下水道の改善も進んだ。大阪市下水道の大半は合流式で、雨水が一定量を超すと未処理のまま川に放流される。東横堀川、道頓堀川でもはけ口は 28 カ所を数える。対策として 15 年に完成したのが内径 6 ㍍、長さ 4.8 ㍍の巨大貯溜管、通称「平成の太閤下水」だ。最大 14 万㍓をのみ込み、雨天時のはけ口からの排出はほぼなくなった。

半世紀ほど前は「ドブ川」呼ばわりされた両川だが、今ではサケヤアユが生息できる水準まで改善された。次の一手として期待がかかるのが今夏、中浜下水処理場で稼働する国内最大規模の膜分離活性汚泥法(MBR)プラント。水の街の文化復興に向けて大阪市は河川の水辺整備にも力を注ぐ。道頓堀川岸には約 1 ㍍に及ぶ遊歩道が設置され、現在は東横堀川岸を工事中。この夏にはにぎわい施設「β本町橋」がオープンする。

(2021 年 4 月 30 日)

